



HOKKAIDO
UNIVERSITY

順応科研+ α における この1年 & これから

三上直之

2017年2月5日
名古屋大学東京オフィス

活動の三つの柱

- 1. 順応的ガバナンスのツールとしてのミニ・パブリックス**
- 2. 事例研究：順応的ガバナンスの要件の解明**
- 3. 環境社会学の観察・記録の方法としての映像の活用**



1. ミニ・パブリックスと順応的ガバナンス

- **Handbookへの執筆**
 - 英研究者らとの交流WSからのスピノフ企画
 - ***Handbook of Democratic Innovation and Governance*** (Stephen Elstub他編、Edward Elgarから刊行予定) に、アジアにおける動向のレビュー論文 “**Asia: Trends in democratic innovations in Asian countries**” を執筆中
 - 4月末×切だが、来年度一杯は手がかかりそう
- 【別プロジェクトでの活動】
 - 「地球規模かつ超長期の複合リスクのガバナンスにおけるミニ・パブリックスの役割」共同研究を企画中 (H29科研費に応募済)



2. 順応的ガバナンスの事例研究

- 『どうすれば環境保全是うまくいくのか』第7章
 - **EPO**北海道による渡島大沼のラムサール条約登録を事例として分析。協働の支援のかたちとして、「寄りそい型」と「目標志向型」を析出
- 大沼でのフィールドワークを継続
 - 今回の本で脇役だった**IM**さん（現地ラムサール協議会会長）を主人公としたストーリーを書きたい。順応的ガバナンスにおける移住者の役割を入り口に。インタビューに着手済み
 - 『若者の「地域」志向とソーシャル・キャピタル』での問題意識も合流させる（「回帰」という希望、多様な移動・交流の価値）
 - 物語を書く以上、人物が鍵になる。順応的ガバナンス論とかみあう「人間像」とはいかなるものか？



2.順応的ガバナンスの事例研究

【別プロジェクトでの活動】

- 三重県英虞湾での沿岸遊休地(干拓地)への海水導入による干潟再生の事例研究*

*科研費基盤B「干潟再生事業における住民認識に根ざした新・環境コミュニケーションモデルの構築」(15H02873、研究代表者:山下博美氏)

- 研究者や行政、漁業者らの共同研究で「実証」された再生モデルが、「実装」の段階で減速を余儀なくされ、それに対応して柔軟にシフトダウンが発揮される(=「順応的ガバナンス」の典型例)
- 順応的ガバナンスにおける「時間」の問題
- 今年、マレーシア・英国等でも調査し、国際比較研究へ



「英虞湾和具干潟の再生作業」(14'50'')



3.環境社会学の観察・記録の方法としての映像の活用

- フィールドでの出来事をビデオカメラで撮影し、それらを共有・集積する
- 「社会の順応性を発揮させることに資するツール」(宮内)の一つとして、可能性を探求したい
- この時代に同時多発的に起こっている順応的ガバナンス実践に関するアーカイブの構築へ
- 第1弾として「英虞湾和具干潟の再生作業」(14分50秒)を制作[現在、肖像権等の処理作業中]。
→**YouTube**で公開予定
- 第2弾として、この科研の活動として、「日英ワークショップ in Edinburghレポート」を製作中



Coming up...「日英ワークショップ in Edinburghレポート」



3.環境社会学の観察・記録の方法としての映像の活用

- インターネットで公開する場合、登場人物の肖像権等の処理(公開許諾)が一番の難関
→試行錯誤を通じて、ノウハウを蓄えたい
- フィールドで、映像による観察・記録をお考えの時は、ぜひお声がけを！
 - 技術的なノウハウの交流や情報交換
 - フィールドワークへの映像面からの協力・参画 など

